

中級計量経済学 2025 年度中間試験 解答例

TA: 岡本優太¹

1

(i) 目的関数は、 $\mathcal{L}(b_0, b_1) := \sum_{i=1}^n \{Y_i - b_0 - b_1 X_i\}^2$ 。最小二乗法により (β_0, β_1) を推定するので、

$$\min_{(b_0, b_1)} \mathcal{L}(b_0, b_1)$$

を考えればよい。目的関数 \mathcal{L} の微分は

$$\begin{cases} \partial \mathcal{L} / \partial b_0 = 2 \sum_{i=1}^n (Y_i - b_0 - b_1 X_i) \\ \partial \mathcal{L} / \partial b_1 = 2 \sum_{i=1}^n (Y_i - b_0 - b_1 X_i) X_i \end{cases}$$

により与えられるので、最小化問題の解 $(\hat{\beta}_0, \hat{\beta}_1)$ は

$$\begin{cases} 0 = \sum_{i=1}^n (Y_i - \hat{\beta}_0 - \hat{\beta}_1 X_i) \\ 0 = \sum_{i=1}^n (Y_i - \hat{\beta}_0 - \hat{\beta}_1 X_i) X_i \end{cases} \quad (1.1)$$

を満たす。これが一階の条件である。1つ目の式から、 $\hat{\beta}_0 = \bar{Y} - \hat{\beta}_1 \bar{X}$ であり (\bar{X}, \bar{Y} はそれぞれ X, Y の標本平均)、これと2つ目の式から、

$$\begin{aligned} 0 &= \sum_{i=1}^n X_i Y_i - \hat{\beta}_0 \sum_{i=1}^n X_i - \hat{\beta}_1 \sum_{i=1}^n X_i^2 \\ &= \sum_{i=1}^n X_i Y_i - (\bar{Y} - \hat{\beta}_1 \bar{X}) \sum_{i=1}^n X_i - \hat{\beta}_1 \sum_{i=1}^n X_i^2 \\ &= \hat{\beta}_1 \left\{ \bar{X} \sum_{i=1}^n X_i - \sum_{i=1}^n X_i^2 \right\} + \sum_{i=1}^n X_i Y_i - \bar{Y} \sum_{i=1}^n X_i \\ &= -\hat{\beta}_1 \left\{ \sum_{i=1}^n X_i (X_i - \bar{X}) \right\} + \sum_{i=1}^n X_i (Y_i - \bar{Y}) \end{aligned}$$

とわかる。この式は

$$\hat{\beta}_1 \left\{ \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2 \right\} = \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})(Y_i - \bar{Y})$$

と変形できるので、 $\hat{\beta}_1$ は、

$$\hat{\beta}_1 = \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})(Y_i - \bar{Y})}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \quad (1.2)$$

と表される。

¹京都大学大学院経済学研究科 D3 畠山 優太 okamoto.yuuta.57w@st.kyoto-u.ac.jp 不備があった場合や質問がある場合はこちらまでメールしてください。なお、採点結果に関するお問い合わせにはご回答できません。

(ii) $\bar{u} = \bar{Y} - \beta_0 - \beta_1 \bar{X}$ とする。上の $\hat{\beta}_1$ の式 (1.2) より、

$$\begin{aligned}
\hat{\beta}_1 &= \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \{(\beta_0 + \beta_1 X_i + u_i) - (\beta_0 + \beta_1 \bar{X} + \bar{u})\}}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\
&= \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \{(\beta_1 (X_i - \bar{X}) + u_i - \bar{u})\}}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\
&= \beta_1 + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} - \underbrace{\frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \bar{u}}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}}_{=0} \\
&= \beta_1 + \frac{n^{-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{n^{-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \tag{1.3}
\end{aligned}$$

を得る。右辺第 2 項の分子は大数の法則より、

$$\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i \rightarrow_p \mathbb{E}[X_i u_i] - \mathbb{E}[X_i] \mathbb{E}[u_i] = \mathbb{E}[X_i \mathbb{E}[u_i | X_i]] - \mathbb{E}[X_i] \mathbb{E}[\mathbb{E}[u_i | X_i]]$$

であるが、 $\mathbb{E}[u_i | X_i] = 0$ より、ゼロに確率収束する。分母は $\mathbb{V}[X_i]$ に確率収束するから、全体としてゼロに確率収束する。すなわち、

$$\hat{\beta}_1 \rightarrow_p \beta_1 + 0 = \beta_1$$

なので、一致をもつ。

(iii) 先の (1.3) より、

$$\sqrt{n} (\hat{\beta}_1 - \beta_1) = \frac{n^{-1/2} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{n^{-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$$

と書ける。この分子について

$$\begin{aligned}
\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i &= \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n \{(X_i - \mu_X) - (\bar{X} - \mu_X)\} u_i \\
&= \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n (X_i - \mu_X) u_i - \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n (\bar{X} - \mu_X) u_i \\
&= \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n (X_i - \mu_X) u_i - \sqrt{n} (\bar{X} - \mu_X) \cdot \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n u_i
\end{aligned}$$

と分解する（ただし $\mu_X = \mathbb{E}[X_i]$ とおいた）。右辺第 2 項の $\sqrt{n} (\bar{X} - \mu_X)$ は中心極限定理により正規分布に分布収束するため、bounded in probability であり、第 2 要素は大数の法則より $\mathbb{E}[u_i]$ に確率収束するが、これは $\mathbb{E}[u_i] = \mathbb{E}[\mathbb{E}[u_i | X_i]] = 0$ よりゼロである。したがって、第 2 項はゼロに確率収束する。第 1 項については、中心極限定理により、 $\mathcal{N}(0, \mathbb{E}[(X_i - \mu_X)^2 u_i^2])$ に分布収束する。よって Slutsky の補題から、分子の部分は $\mathcal{N}(0, \mathbb{E}[(X_i - \mu_X)^2 u_i^2])$ に分布収束するとわかる。ここで、分母の部分は $\mathbb{V}[X_i] = \sigma_X^2$ に確率収束するので、再度 Slutsky の補題を用いれば、

$$\sqrt{n} (\hat{\beta}_1 - \beta_1) \rightarrow_d \mathcal{N} \left(0, \frac{\mathbb{E}[(X_i - \mu_X)^2 u_i^2]}{(\sigma_X^2)^2} \right)$$

とわかる。

(iv) 設問 (ii) の (1.3) より、

$$\hat{\beta}_1 - \beta_1 = \frac{n^{-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{n^{-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$$

であった。右辺の確率収束先は

$$\frac{1}{\sigma_X^2} (\mathbb{E}[X_i \mathbb{E}[u_i | X_i]] - \mathbb{E}[X_i] \mathbb{E}[\mathbb{E}[u_i | X_i]]) = \frac{1}{\sigma_X^2} (\mathbb{E}[X_i g(X_i)] - \mathbb{E}[X_i] \mathbb{E}[g(X_i)]).$$

これが漸近バイアスである。

(v) 講義ノート 2 の第 2.9.1 節および講義ノート 3 の p. 1 参照。以下のような例が考えられる。

- 肥料の例や教育投資のリターンの例のように、経済主体の最適化行動（あるいは意思決定）の結果として観察されるデータの値が決まるような状況では、 X と相関しうる観察されない決定要因が u に含まれる可能性があり、その場合 $g(X) \neq 0$ となるかもしれない。
- サーベイ調査で計測したリスク回避度 X を用いて、リスク選好 X^* の職業選択 Y への効果を測る場合、測定誤差が問題になるかもしれない。
- ある財の需要関数を推定したい場合（つまり、 X が製品価格で Y が購入量）、市場価格の決定が需要サイドと供給サイドの 2 本の連立方程式によって記述されるならば、一般に $g(X) \neq 0$ となってしまう。

2

(i) D_i を条件とすると、

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[Y_i | D_i] &= \mathbb{E}[D_i Y_i(1) + (1 - D_i) Y_i(0) | D_i] \\ &= D_i \mathbb{E}[Y_i(1) | D_i] + (1 - D_i) \mathbb{E}[Y_i(0) | D_i] \\ &= D_i \mathbb{E}[Y_i(1)] + (1 - D_i) \mathbb{E}[Y_i(0)]\end{aligned}$$

を得る。ただし、最後の等号は D_i の独立性を用いた。

(ii) D_i を条件とすると、

$$\mathbb{E}[Y_i | D_i] = \mathbb{E}[\beta_0 + \beta_1 D_i + u_i | D_i] = \beta_0 + \beta_1 D_i + \mathbb{E}[u_i | D_i] = \beta_0 + \beta_1 D_i$$

を得る。ただし、最後の等号は $\mathbb{E}[u_i | D_i] = 0$ を用いた。ここで (i) の結果を思い出すと、

$$D_i \mathbb{E}[Y_i(1)] + (1 - D_i) \mathbb{E}[Y_i(0)] = \beta_0 + \beta_1 D_i$$

である。これを整理すると、

$$D_i (\mathbb{E}[Y_i(1)] - \mathbb{E}[Y_i(0)] - \beta_1) + (\mathbb{E}[Y_i(0)] - \beta_0) = 0$$

を得る。したがって、 $D_i = 0$ のときを考えれば、 $\beta_0 = \mathbb{E}[Y_i(0)]$ とわかる。よって、 $D_i = 1$ のときを考えると

$$0 = (\mathbb{E}[Y_i(1)] - \mathbb{E}[Y_i(0)] - \beta_1) + (\mathbb{E}[Y_i(0)] - \beta_0) = \mathbb{E}[Y_i(1)] - \mathbb{E}[Y_i(0)] - \beta_1$$

なので、 $\beta_1 = \mathbb{E}[Y_i(1) - Y_i(0)] = \tau^{\text{ATE}}$ とわかる。

(iii) u_i はその定義より、

$$\begin{aligned}u_i &= Y_i - \beta_0 - \beta_1 D_i \\ &= (D_i Y_i(1) + (1 - D_i) Y_i(0)) - \mathbb{E}[Y_i(0)] - (\mathbb{E}[Y_i(1)] - \mathbb{E}[Y_i(0)]) D_i \\ &= (Y_i(0) - \mathbb{E}[Y_i(0)]) + \{(Y_i(1) - Y_i(0)) - \mathbb{E}[Y_i(1) - Y_i(0)]\} D_i\end{aligned}\tag{2.1}$$

により与えられる。

(iv) $\mathbb{E}[D_i] = \mathbb{P}[D_i = 1] = p$ 、 $\mathbb{V}[D_i] = \mathbb{E}[D_i^2] - \mathbb{E}[D_i]^2 = \mathbb{E}[D_i] - \mathbb{E}[D_i]^2 = p - p^2 = p(1-p)$ である。

(v) 問 1 の (iii) より、最小二乗推定量の漸近分散は

$$\frac{\mathbb{E}[(D_i - \mathbb{E}[D_i])^2 u_i^2]}{\mathbb{V}[D_i]^2}$$

であった。ここで、繰り返し期待値の法則を使うと、

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[(D_i - \mathbb{E}[D_i])^2 u_i^2] &= \mathbb{E}[(D_i - \mathbb{E}[D_i])^2 u_i^2 | D_i = 1] \mathbb{P}[D_i = 1] + \mathbb{E}[(D_i - \mathbb{E}[D_i])^2 u_i^2 | D_i = 0] \mathbb{P}[D_i = 0] \\ &= \mathbb{E}[(1-p)^2 u_i^2 | D_i = 1] p + \mathbb{E}[(0-p)^2 u_i^2 | D_i = 0] (1-p) \\ &= (1-p)^2 \mathbb{E}[(Y_i(1) - \mathbb{E}[Y_i(1)])^2 | D_i = 1] p + p^2 \mathbb{E}[(Y_i(0) - \mathbb{E}[Y_i(0)])^2 | D_i = 0] (1-p) \\ &= (1-p)^2 \mathbb{E}[(Y_i(1) - \mathbb{E}[Y_i(1)])^2] p + p^2 \mathbb{E}[(Y_i(0) - \mathbb{E}[Y_i(0)])^2] (1-p) \\ &= (1-p)^2 p \sigma_1^2 + p^2 (1-p) \sigma_0^2\end{aligned}$$

である。ただし、3つ目の等号は (2.1) を用いた。したがって、漸近分散は

$$\frac{\mathbb{E}[(D_i - \mathbb{E}[D_i])^2 u_i^2]}{\mathbb{V}[D_i]^2} = \frac{(1-p)^2 p \sigma_1^2 + p^2 (1-p) \sigma_0^2}{p^2 (1-p)^2} = \frac{\sigma_1^2}{p} + \frac{\sigma_0^2}{1-p}$$

である。